

## ■いわき育英舎への訪問

### <いわき育英舎について>

いわき育英舎はJRいわき駅から車で20分ほどの山や田畑が広がる田園地帯にあり、現在3歳から高校3年生までの子どもたち30名が生活しています。福島第一原子力発電所からは直線距離で34キロ、福島県内では比較的空間線量が低いと言われているところです。1982年の設立当初からある大きな建物のほか、少し離れた交通の便の良いところに、民家を利用した就学前の幼児4名と高校生のためのグループホームもあります。子どもたちは福島県内全域から集まってきており、中には、自宅が倒壊したり津波で流されたりして、家庭に戻るがますます難しくなっている子どももいるとのこと。



いわき育英舎

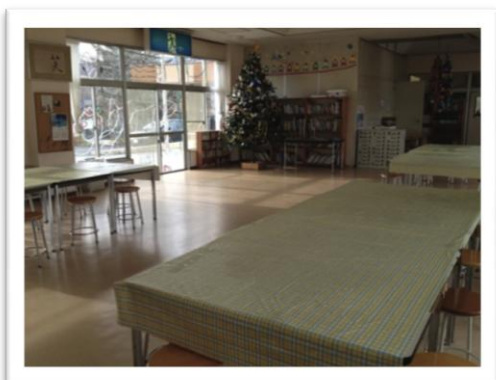


子どもたちの居室（加工しています）

### <震災直後のこと>

施設長の市川誠子先生が対応して下さいました。震災当時のことや、昨年関わりを持たせていただいたからのこの1年をどのように過ごされてきたのか、いろいろとお話を伺いました。その一部をここでシェアさせていただければと思います。

震災直後は、子どもたちも先生も全員無事ではありましたが、換気で放射性物質が入ってくるのを防ぐためエアコンも灯油ストーブも使えず、小さな電気ストーブを食堂に置いて、全員が身を寄せるようにして過ごしていたそうです（電気は当日夜に復旧）。断水していたため、タンクに残ったわずかな水を大切に使い、その後は、先生方と中高生たちとで、地域の方からいただいた簡易水道の水や山のわき水を運び、飲料水と生活用水を確保。施設内に残っていた缶詰やお米、お菓子などでしのぎました。しかし、道路が封鎖され、外に買い出しに行くことはもちろん、物資が一切入ってこなくなってしまったため、一週間後には施設を離れることになりました。子どもたちを全員連れて、公用車などで中通りの某市に避難したそうです。いわき育英舎は、福島県内にある8か所の児童養護施設の中で、唯一施設からの避難を余儀なくされました。



震災直後 皆で過ごした食堂

### <一番好きなおもちゃをひとつだけ>

避難するとき、先生は子どもたちに、持っている中から着られなくなっても良い服を選んで着ていくこと（車を降りたら、すぐに捨てるか除染に回すため）、そして、「いつここに戻ってこられるかはわからないのだから、一番好きなおもちゃをひとつだけ持って行くように」と指示をしたそうです。お気に入りのゲームをひとつだけ、大好きなぬいぐるみをひとつだけ…。あとは各々着替えをリュックに入れて車に乗りました。しかし、避難した先は、事故直後の空間線量 20 マイクロシーベルトを超えていた場所だったとのこと。住民の方々は、表で小さな子どもの手を引いて給水の列に並んでいたそうです。

幸い、物資は潤沢にあり、県の施設内の空いている部屋に布団をびっしり敷いて、外に出ることなく、2週間ほど過ごしました。しかし、狭い場所に子どもたちを閉じ込めておくことも限界になり、学校も通常通り始まるとの連絡が入ったため、物資も入り始めていたいわきに戻ったとのことでした。

市川先生は、「施設の子どもたちは過酷な環境を逃れて施設に入所してきたのに、原発事故のせいでまたそこから避難しなければならなかった。そのときは大変やるせない気持ちでした」とおっしゃいました。児童養護施設に関することは県の管轄であり、福島県内では比較的線量が低い地域のため、今のところ育英舎では除染は行われていません。地域の小中学校での体育の授業などは普通に外で行われています。今は、就学前の幼児だけ、外で過ごす時間を1日40分だけと区切って過ごすようにしているそうです。「心配しながらも、心配し過ぎていたのでは参ってしまって、日々の生活もままならないのが現実」。重い言葉でした。



この日の空間線量は0.148 マイクロシーベルト（平均的な数値）

### <みんなで行った佐渡旅行>

ほっとするお話もありました。多くのボランティアの訪問や支援が途切れることなく続いていること。そして、昨年の夏休みには、子どもと職員全員で二泊三日の佐渡旅行に出かけ、海水浴を楽しむことができたそうです。施設が公共交通機関の少ない不便な場所にあることもあり、普段、学校や通院以外に施設の外に出かけることがめったにない子どもたちにとって、とても大きな経験だったとのこと。また、職員の方々にとっても、思う存分子どもたちを野外で遊ばせることができ、これほど肩の力が抜けたことはなかったとおっしゃっていました。この佐渡旅行の他にも、様々な支援を受けながら、少人数ずつ京都への保養などにも出かけられたとのことでした。

「旅行などに限らず、家庭にいれば普通にできるようなさまざまな経験を積み重ねてやりたいと思っています。子どもは経験によって変わっていく、というか、経験によってしか変わらないのです」。そう先生はおっしゃっていました。そうしたお話の流れだったためでしょうか。今回皆さんがお寄せくださった寄付金を

お渡ししたところ、市川先生は、「今年もぜひこのお金を使わせていただいて、子どもたちと旅行に行きたいと思います」と言ってくださいました。そうしていただけるのなら、何よりも嬉しいこととお伝えしました。



統括指導主事・高井裕幸先生と 施設長・市川誠子先生

訪問した12月21日はちょうど終業式の日で、お屋前に小中学生が次々と帰ってきました。どの子も明るくて人なつこい様子でしたが、その中には入所したばかりの幼い兄弟もいました。皆、虐待や保護者の死、貧困など、困難な背景をもつ子どもたちです。

ひとりの中学3年生の男の子が、「(成績が)上がった!上がった!」と大きな声を出しながら玄関を歩いてきて、興奮した様子で市川先生に通知票を見せていました。そして、廊下を飛び跳ねるようにして自分の部屋に戻っていきました。

現在では、児童福祉施設の子どもたちもほぼ全員が高等学校に進学するようになりました。「高校を卒業するまでの間は施設で安定した生活ができるし(※中卒で就職する場合は15歳で施設を出て、後ろ盾のないまま独り立ちしなければならない)、高校を卒業すれば職業選択の幅が大きく広がるので、がんばって望む高校に行っていきたいと願っています」。

「成績が上がったと言っても、アヒルの競争みたいなものですよ(笑)。でも、ここの子どもたちは、どうせ自分なんか、とか、どうせ施設の子だから、というのが口癖なんです。長く施設で育ってきた子どもが、「行きたい高校に行くために勉強しよう」。そうした気持ちになれているというだけで、私たちはほっとするのです。少なくともその子は、前を向いて進もうとしているということですから」。市川先生の言葉が強く心に残りました。